

学の教師として身にしみて感じざるを得ない。

帰国してから4か月が経つたが、全面改革の激流に巻き込まれる祖国ではすみずみに到るまで深刻な変化が出ていることに痛感している。「浦島太郎」の私にとって、あらゆる面で再認識して日進月歩のテンポに追いついていかなければならない。そのためには、体系的かつ適切な論議が不可欠なことはいうまでもない。本文の内容は

決して洗練されたものではなく、あくまでも限られた経験から拾った私見にすぎない。ただ、本稿を通じて日中大学の相異の一端を伝え、これから一層広がっていく両国間の文化交流にわずかでも役立てば幸いと思ひ、長年お世話になった日本の諸先生と友人に捧げるしだいである。

コラム

会社は今美容整形中

軽薄短小と騒がれ一種の流行とたかをくくっていた。しかしムードが現実的な問題に発展し、重厚長大で稼いだことが諸悪の元であるかのようにいわれると、いささか愚痴もこぼしたくなる。

今社も大衆も栄えつつある時代に仕事をした私は、質実剛健にして堅牢強固な鉄鋼マンこそが、発展する国を支える骨格として、女々しい産業をも大目に見れる自負心があつた。物は大きく力強く、エネルギーであれば些細なことは気に止めぬ感覚で、油の染みや汗の臭いも男の誇りであつた。

この活力ある源流の支えで川下文化が開花していったことには、その恩恵を受けている個人として何の恨みもない。もちつもたれつであればこれまでの自負心の低下は軽薄短小産業の恩恵で相補うことができる。もちろん水源さえ切れなければ、混沌とした川下文化に多くの人間臭と多様な価値感を見出すことができ楽しい。

しかし問題は川上を成す基幹工業は、きたるべきこの国の産業としてふさわしくないとする風潮である。一時の流行を越えて、会社も国も本気になつてしまつた。構造的に川上に生息するように遺伝子の授受を行つてきた鉄鋼マンは、果たして川下で生きる新感覚に切替えることができるだろうか。一部の研究者や管理者だけで

なく、鉄の臭いの染みた現場マンを含めてである。いずれにしろ執刀は始まつたのである。

NHKの文化ジャーナルで多摩美術大学の西尾先生が、軽薄短小はもはや古くこれからは遊楽美感だという。その理由は単位で計れるか否かにあり、虚業こそナウイといった感じだ。せつかく川下に目を向けたばかりなのに更に虹の掛橋を登れと変革を迫る。

鉄鋼にとって比較的親縁のチタンにこの一面を教えてくれる記述がある。形状記憶合金を利用した美学で学術誌のド真中に、触れたいくなるような美女が上ぞつている(チタニウム、ジルコニウム, 34 (1986) p. 45)。古来からの豊胸美の中でチタンが果たした人気の秘密を解説しているが、川下の軽やかな感覚が染みしてくる。商品名も“ソフィブラこちE”，見る者も付ける子にも遊楽美感の刺激を与える。

今会社はこれら新分野開拓に懸命でバイオをやつているところも多い。私のような環境不順応な者は遺伝子組替実験のモルモットにしか役立ちそうにない。増子先生は本誌(73 (1987) p. 398)で非鉄側から見た鉄は、いまだに不思議な金属だという。チタンほどの感覚でないにしろ、新感覚で鉄に取り組む人々が見そこなわれる風潮はこわい。美人になることは誰かが不美人でなければならない。

(鋼管計測(株)化学技術部 瀬野 英夫)